

令和3年度 課程博士学位申請論文 要旨

脳死の表象

東京藝術大学大学院美術研究科 美術専攻 油画研究領域 壁画
学籍番号 1317911 山崎千尋

西洋世界で教会が解体されると共に広がった、我々が時に“art”と呼ぶものはその性質上、時代の節々で〈死〉というテーマを取り扱ってきた。書き出しをこのように始めると、思い浮かぶのはメメント・モリやヴァニタスなどの頭蓋骨をモチーフとした絵画であろうか。現在でも〈死〉というモチーフを取り扱う美術作品は世界中のアーティストが発表しているが、死の確実さを記号化するために召喚されるこれらのオブジェクトは本研究が題材としている〈曖昧な生/死〉、「脳死」を描くには不向きなように思える。脳死現象が60年あまり議論され続け、それでいて明確な整理がなされていない最も大きな原因の一つとして、生物学的な意味での活動が不可逆的に停止していながら、感覚的には「死んでいるように見えない」という問題がある。現状、人は対象が生きてると知覚するために、生命の定義が科学的にどのように語られているかにかかわらず、心拍のような不規則な運動や、体温を有しているか否かで対象の生死を判断する向きがあり、この感覚と矛盾する生死を受け入れ難い。逆に人間の生命への価値観が変化すれば、脳死問題そのものが消失する可能性もあるだろう。医療技術の発展無くして〈脳死〉という概念が生まれ得なかった事を鑑みれば、脳死下臓器移植が推進される時代の流れの中で実践的に概念の変容が起こり、脳死状態が感覚的にも死であると一般化されるようになる可能性も十分に考えられる。

〈死〉の表象について取り組むことが芸術の最も重要な任務の一つであるならば、脳死問題の登場によって自明性が崩壊した〈死〉がいかに表象可能であるかについて、美術研究の立場から検討することは有効であると考え。本論はこのような問題意識を持つ表象論である。

〈脳死〉とは頭部外傷や脳卒中などによって、人間の脳幹を含めた脳全体の機能が不可逆的に喪失した病態の事である。この概念は1950年代の終わり頃、朝鮮戦争の最中急激に発達した人工呼吸器が医療現場に普及された事により「超過昏睡」「不可逆昏睡」などの言葉で認識されるようになり、従来の呼吸停止、心停止、瞳孔の拡散固定を基とする三兆候を死の概念と認識していた世界各国を混乱させた。日本では1968年に脳死者から心臓移植をおこなった医師が殺人罪で起訴されたいわゆる「和田心臓移植事件」で大きな注目を浴び、臓器移植という実践的な課題と共に立法をめぐって議論が繰り広げられた。2009年に改正された「臓器移植に関する法律」では臓器移植の場面においてのみ脳死＝人の死と定義されており、2021年現在、国内での脳死下臓器提供件数は累計662件にも及んでいる。脳死状態を人の死とする最も有力な見解は「有機的統合性」という生理学の概念を基礎に据えたアメリ

カ大統領評議会報告書『死の定義』[1981]が提示するものであるが、この見解については脳神経学者アラン・シューモン(D. Alan Shewmon)によって明確に批判されており、この批判については日本でも生命倫理学者である小松美彦らによって紹介されている。ここまで議論の推移を振り返ってみると、脳死現象が観測されたから60年あまり、いまだに私たちはこれを人の死か否か整理できていない事がよくわかる。本論はこのかくも曖昧な現代の生/死を、美術作品は如何に表象可能であるかを問うものである。

本論は終章を除く全5章で構成されている。

第1章では筆者が10代に経験した父の死について語り、死を主題とした作品作りに関する筆者の動機について、詳細に示している。

第2章では、〈脳死〉を主題とした美術作品の制作論を構築するにあたり必要な論点の所在を明らかにする。本論の命題である「脳死は美術作品によって如何に表象可能であるか」に対して、まずはその問いの妥当性を検討するために、〈脳死〉の「死を題材としてきた諸美術」との通時性について言及する必要があるだろう。この考察は「脳死は人の死か」という所謂「脳死問題」の議論と合致するため、主に「脳死問題」を傍観し、歴史的な経緯の整理を行う。

第3章では前章を受けて〈脳死〉がただそれだけで言語的に諸芸術の文脈に内包されるということ以外の、より説得的な根拠について検討し、その上で「脳死の恒久性」という点についても取り上げる。「脳死問題」における議論は過渡期を迎えているのか、研究対象としての有意性について言及する。本章の作業は、本論の意義についてもう一つのアンチテーゼを論じるものである。

第4章では第2章、第3章で明らかにした二つの反対命題に対応するために、「失踪」という概念を扱う。表現手法として、脳死問題を題材としながら「失踪」というテーマに接続させ、作品「no/w/here/cat」の芸術作品としての通時性と、恒久性を明示する。

第5章では前章で語られた脳死をモチーフにした創作研究の論点や筆者の取り組みを踏まえて本作の詳細と制作過程を説明する。

終章では5章にわたり論述した本研究の存在意義ではなく、本論、ないし本作の狙いとは何かについて語る。作品制作の中である事件について、ある社会問題に関して語るということは、作品の表象の裏側に作者の存在、観察者の視座も含意される。こうした表現者の暴力性の存在を自らの中に感じながらアーティストはどのように振る舞い、どのような狙いをもって作品を発表すべきか。答えようのない問いに筆者なりの回答を提示し、本論の結論としている。